

◆◆◆  
書評  
◆◆◆

伊藤重信著 長島町誌 上巻

三重県桑名郡長島町殿名に生れた彼が、県立高校を停年退職してから、永年集収した資料と整理してまとめたもの。第一編の「序」では(一)長島の国土(二)長島の土地形成とその地名の起原を述べ、当町が木曾川下流の砂洲から始まり輪中として成立した経過を地史的に把握、その国土性を究明。第二編の「中世までの長島」では、平安・鎌倉・室町期の通史を述べているが、特に長島願証寺と織田信長との関係を強調、第三編の「近世の長島」では安土桃山時代から江戸時代までを、長島の領主になつた滝川一益・織田信雄・羽柴秀次に關し、戦国領主と百姓との関係、江戸時代の藩主と藩政から新田開発と輪中根性、農地と農民生活など興味あることが記されてある。

彼は中世のところで「長島一向一揆という名称は使いたくありません、長島の門徒衆の立場で書いた。願証寺の系譜については、今までの研究者の未知の史料を発掘した」と云っているが、郷土人としての立場から新しい史料の発見、新しい史観に立っている。しかも中世の戦乱は彼が陸軍将校として、第二次世界大戦に参加した経験から、町民にわかりやすく歴史小説的に書いたのが面白い。

また木曾・長良・揖斐の三川にかこまれ絶えず水害に悩まされた郷土を「百姓の新田開発を度重なる災害でうちのめされた記述は、百姓の墓碑銘でも誌す気持ちで執筆した」と郷土愛に燃ゆる気持ちで

述べている。このような記述は輪中に生れ輪中で育つた彼でなければ書けない。また「藩主に飾られた系譜にメスを加えた。郷土史は百姓の歴史である」と云っているように、かなり社会思想的な面があるのも面白い。

特に本書は「歴史の眼」と題して、ところどころに彼独特の郷土史観を記している。このような町史は他にない。これも彼が小学生時代から「私も一度は郷土の歴史を書いて見たい」と念願して、五十年余りという永い間、常に郷土の歴史に関心を持っていたためではなからうか。それだけに偏見なところもないではないが、マアというところでしょう。何れにしても歴史家の書いた郷土史でなく、地理と歴史を学んだ郷土人が書いたものであるから、あらゆる点において空間的なものを忘れずに書いている。「時間の中の空間」という立場から書いている。これが本書の特色であり、歴史地理学的な考え方であろう。(A5版・五→八頁・三〇〇〇円・

三重県桑名郡長島町殿名・伊藤重信領布・送料三〇〇〇円)  
(川崎敏)

### 第一八回総会・大会の報告

昭和五〇年度(第一八回)総会・大会は、去る四月一日・二日、京都大学教養部において開催されました。総会は午後一時より第一会場において、大島襄二君を議長として開かれました。まず、昭和四九年度事業報告、決算報告が行なわれ、さらに昭和五〇年度の事